

## 如飢似渴—私の図書館雑感—

葉 陵 陵

昨年の十月に着任以来、いくつかのインタビューを受け、又、短文を書いてきましたので、あまり書くこともありませんが、今回は私の感じた中国と外国の図書館について雑感を書いてみたいと思います。

文化大革命が終った翌年の1977年の末ごろ、中国では、大学受験制度が12年ぶりに復活しました。そのお蔭で、私も含めて大勢の若者が、大学で勉強する夢をかなえられました。その年代の中国の大学生は、やっと手に入れたこの貴重な勉学のチャンスを何よりも有難いものと思い、しかも「十年動乱」によってむだに過ごした青春を一日も早く取り戻そうと考えていたので、まるで「如飢似渴」（飢えて渴いたものが食物と水に飛びかかる）のように、勉強しました。大学で私ははじめて日本語と出会い、同じく漢字を使っている日本語に親しみと面白さを感じて、第一外国語として選択しました。ところが、当時、すべての伝統文化と外国文化を排斥した文革の直後なので、日本語の教科書も販売されていませんでした。大学図書館の埃まみれの一隅から見つけた文革以前の教科書を同級生皆で謄写版で印刷したことを、いまでも思い出します。大学図書館の閲覧室や自習室は、いつでも満杯でした。ちょっと人より遅く入室すると、読みたい雑誌や本が先に他の人に借りられてしまい、座席もなくなりますので、開館前に、入口には既に長い行列ができていることもめずらしい光景ではありませんでした。それから十数年たち、90年代の中国の大学生も時代の流れと共に、いろいろなことに多忙となりました。試験期間以外はガラガラの母校の閲覧室を見た時、何となく寂しい感じがしたというのも偽らざる気持ちです。

1987年、既に法学の修士課程を修了し、法学部の専任講師となった私は、中央大学日本比較法研究所の客員研究員として、来日することができました。そして、専門分野の研究と日本語の勉強を一層深めるために、1988年には、大学院博士課程に入学し、1994年には法学博士号を取得しました。この留学生活では、様々な図書館—国会図書館から各大学の図書館、住んでいた地域の市立、区立図書館まで、ずっとお世話になってきました。私にとって、日本の図書館は殆どの図書が開架式になっていて、必要なものがすぐに利用できるため、本当に有り難いものでした。

1990年に、私は機会があり、アメリカ、カナダの諸大学へ資料調査に参りました。大学の学術レベルを判

断するには、その大学の図書館を見ればわかるといわれますが、私はボストンに滞在していた間に、これを実感することができました。その時、私はよくハーバード大学の燕京図書館（Harvard-Yenching Library）に通いました。ハーバード大学には、内外あわせてなんと九八の図書館があります。北京を意味する燕京という図書館やフェアバンク東亜研究センター図書館（Fairbank Center for East Asian Research Library）はその中の二つであり、専ら中国語、日本語及び朝鮮語などの東アジア関係の書籍や雑誌、新聞が収蔵されています。私は燕京における中国語の蔵書の豊富さと多様さに、とにかく驚きました。中国大陸、台湾、香港は言うに及ばず、東南アジア諸国から出版されたものまで、社会科学関係のありとあらゆる中国語の書物が収集されているようです。例えば、既に中国国内でも見られない希覓本や禁書、そして文革時代の宣伝ビラまで蒐集されています。そこで、複雑な中国の事情をより客観的に観察し、しかも公正に分析するには、中国本土や台湾、香港のごくよりも、このアメリカのほうがか最も適切な場所ではないかと思われ、なぜ世界各国の中国学研究者がここを訪ねてくるのか、その理由もよくわかりました。私も、国外に出ることがなかったら、目にすることはなかった様々な本と出会いました。

アメリカとカナダでは、大学の図書館だけでなく、普通の公立図書館、例えば、ボストン市立図書館、オタワ市立図書館などにも、英語以外の、様々な言語の書籍や資料が揃っていました。移民の国の文化における多元性と包括性を実感させられるばかりでなく、非英語圏出身の我々にとっては、親しみのもてる場所ともなっています。

中国では、図書館事業も一種の情報サービス業であるという観念がまだ十分に認識されていないせいも、図書館の役割は閲覧者のための「情報流通センター」というよりは、むしろ書物を収蔵するための「蔵書館」という考えにとどまっている傾向があるので、閲覧者にとって、まだ利用しやすい図書館とは言えない状態です。したがって、中国の図書館は、アメリカや日本などの図書館のあり方を学び、「機能転換」のような改革を行う必要があると、私は思っています。

（いえ りんりん 法学部助教授 行政法）